

海か、プールか。どっちでもいい、と思った。しかし、それは大きなまちがいであった。プールを選んでいれば今頃、草臥れたスーツ姿の穂高に夢洲の駅まで見送られることもなかっただろう。

先日まで信州に里帰りしていたという彼は、例のマスコットが消えかかっているハンドタオルで、額に浮いた汗を拭った。

「郵送でもよかったのに、誕生日にすみません」

「いやいや、ついでだから」

彼は、NANMUとロゴが入った角形封筒を抱えながら、「ああ」と納得した。

一般客が増えてくる手前で、「じゃあ、私はここで」と足を止め、深々と頭を下げた。私は彼に見送られながら、親子連れやカップルたちの間に混ざった。

夏休み真っ盛りの雑踏の中でも、視界補正レンズは上手く機能している。自動車や自転車の運転は無理でも、人混みの中を歩くには十分だろう。気になることがあるとすれば、道案内やポスターの文字情報を拾いすぎるぐらいか。無視したくても、「8.17」のイベント告知が鮮明に飛び込んでくる。

「終わったイベントのポスターは、さつきと剥がして欲しいよね」

自分の声にしてはやや高めの音が、自分の口より低いところから聞こえてきた。無意識に大きめの独り言を口にしたのではないらしく、周りの誰も私のことを気にしていない。往来の邪魔にならないよう足を止め、周りをよく見る。△の自動補正が追いつくよう、ゆっくり右から左へ顔を動かした。

「こっちだよ、お父さん。こっち、こっち」

声の主はまだ見つからない。「すみません」と繰り返しながら、人混みを掻き分けて声のする方へ、ずんずん進む。いつの間にか建物の外、海沿いの遊歩道まで来ていた。さつきより人は減ったものの、声の持ち主はまだ見えない。

「だから、こっちだって」

親子連れやカップルが点々と座っているものの、私に声をかけてくるような人は見当たらない。声の方向からしても、どうも海の方から聞こえてくるらしい。

落下防止の柵もない水際へ、足元に気をつけながら近づいてみると、息子の湊が

波間に漂いながら、「やあ」と手を上げた。

私が「何をやっているんだ？」と声をかけようとする、彼は「まあまあ、気にしないで」と相変わらず海中から身体を出そうとしない。私も仕方なく、岸の縁に腰を下ろした。

「お父さん、元気？」

「ああ、まあな」

私は「そっちは？」と言いかけて、言葉を飲んだ。湊はニコニコ笑いながら、私を見ている。私も彼をじつと視る。あの日と同じ服装で、顔付きや身体は記憶にある姿より成長しているように思えた。私は湊へ、手を差し出していた。

「だめだよ、お父さん。気を付けないと」

湊は私の手をじつと見て笑った。

「お盆明けの水辺だよ？」

「ああ、分かっている。ほら、早く」

岸から身を乗り出し、更に腕を伸ばした。一度は離れた手も、今度は絶対離さない。

私の手を握り返した湊の手は、抵抗の余地もない力強さだった。

※ 「読売キャンパス・ランサーズ」(愛称・ヨミティ)で連載されていた「有栖川有栖さんをつくる不思議の物語」、二〇〇六年七月分の佳作選出『海童子(うみわらし)』をタイトルも含めて大幅に加筆修正。

初出 令和四年一〇月一五日 noteにて公開